

# 今月の逸品

NO. 49 2020.08~2020.09



## 縄文土器 深鉢 醍醐遺跡（滋賀県長浜市）出土

京都教育大学の学長を務めた考古学者・小江慶雄（1911-1988）が調査を行った数多くの遺跡の一つに、滋賀県長浜市（旧・浅井町）の醍醐遺跡があり、昭和26年（1951）から同27年にかけての調査で出土した遺物の一部が、京都教育大学教育資料館に収蔵されている。そのなかには、縄文時代中期（B.C.E.3000-B.C.E.2000頃）の土器が多く含まれている。醍醐遺跡から出土した縄文時代中期の初め頃の土器は、瀬戸内海地方のものに似て、粗くて固い縄で縄文をつけ、貝殻を押し当てたり、隆帯を貼り付けて文様としたものが目立つ（参考資料：深鉢／京都教育大学所蔵）。他方、今回取り上げた「深鉢」（写真左）は、縄文時代中期の終わり頃の土器である。

小江が調査した段階では、近畿地方における縄文時代中期終わり頃の土器の出土は稀少で、後にこれらは「醍醐式土器」などとよばれ、研究史上に大きな意義を持った。それは単に珍しいからというだけでなく、その特徴的な形状が注目されたからでもある。口縁に大きく肥大した大形突起、隆線の曲線的装飾といった装飾性に富む形状は、関東・中部の縄文土器の特徴に通じる（学校の歴史教科書によく掲載される火焰型土器が典型である）。もっとも関東地方のものと比較すると精緻さに欠け、胴部の構図も簡素化されていることは否めない。しかし、このことは本作の価値を損ねるものでは全くない。そう断言できる理由の一つに、本作の出土により、縄文時代中期終わり頃の琵琶湖東北岸地域が、瀬戸内海地域などの西日本のみならず、東日本との交流によっても支えられていたことが知られるようになったことがある。出土遺物を通じ、古代の人々の交流や物流の実態が垣間見える好例といえよう。

### 参考文献

小江慶雄「滋賀県醍醐遺跡発見の縄文式土器」『京都学芸大学学報』（A・文科）5号、1954年  
中村健二「醍醐遺跡：山麓の縄文遺跡」『滋賀県文化財教室シリーズ』221号、2007年

執筆者：中村 翼（社会科学科 講師）

※附属図書館で展示しています。